恍　惚・中村真一郎

恍　惚・中村真一郎

新潮社版

恍惚

昭和40年7月25日　印刷
昭和40年7月30日　発行

著　者　中村　真一郎

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社

東京都新宿区矢来町71
電話(260)1111(代)振替東京808番

印　刷　株式会社　金羊社

製　本　神田加藤製本所

定　価　380円

©1965 Shinichiro Nakamura Printed in Japan.
乱丁，落丁本はお取りかえいたします。

恍惚

目次

出会い　七
タレント・クラブ　一六
本当の生活　三〇
二度目の出会い　四一
会社と家庭　五六
愛の疑惑　六九
秘密　八二
第二の秘密　九六
ある人　一一二
対決　一三〇
二度目の対決　一四五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

行動へ　一五八
試錬の日々　一七四
欲情　一八九
欲情の向こう側　二〇四
遠足　二一七
遠足のあと　二二九
失踪　二四四
事件の余波　二五六
手紙　二七一
奔走　二八二
終局　二九四

装幀　須田寿

恍

惚

出会い

牧本澄夫がはじめて今浦政子に会った時、自分にとって、人生で最初の経験がはじまったことに、気がついたかどうかは判らない。

しかし、彼ははじめて「女性」をみた、と思った。

——それは、彼女が弟の政次郎と共に、彼の狭い部屋の畳のうえに、坐りにくそうに膝を揃えて、丁寧にお辞儀をし、それから頭をあげながら、白粉気のない顔のなかから、静かな瞳で、上眼づかいに彼の眼を見返した瞬間だった。

彼は心の暗闇のなかに、不意に明りがともされたように感じた。淋しい山間の夕方に、暮れかかった空気のなかで、人を惹きつけるように暖かく光りはじめている灯火を眼にする時のような、郷愁に似た感情が胸の奥から湧き出てきた。そして、そうした感動をあたえてくれるのが、「女性」というものなのだ、と彼は用事がすんで、彼女と弟とが帰って行ったあとで、思いついた。

その思いつきは、彼の気分を愉しくさせた。彼はもう数カ月も、ほとんど明るい気持というものを忘れていたのだから、この愉しさを消えないように大事にしよう、と自分に云いきかせた。

「この気持を、このままやり過ごしてしまっては、惜しい……」

と、彼はひとりきりの部屋で、口に出して云ってみた。

それから、もう一度、あの政子という女性の瞳の色を思いだそうと努力した。明るく澄んでいるのだが、どこかに悲しさが漂っている。そして、その悲しさは無垢な明るさそのものから来るのだ、と彼は思った。一点の曇りのない空や、透明な湖が、見る人の心に、理由のない悲しさを湧きださせることがあるように。

そこで、また反省癖の強い彼は、明るさのなかにひたすら歓喜を感じるような人間も多いだろうに、まだ二十五歳の若さで既に、美しい汚れなさから直ぐ悲しさを連想する、自分の心の傾きを哀れだと考えた。

が、また、そうした自分の心の癖に向い合う時、普段は必ず苛立って不愉快になるのに、今はそうした自己憐憫のような気持も、寛大に許せるような気分になっていることに気付いた。そして、それもあの人の瞳の色のおかげだと思った。

彼はこの静かな愉しさを、じっと味わおうとして、眼を閉じた。すると自然に、瞼のうらに、政子の喉から胸のあたりにかけての、きめの細かい肌が、白く浮きあがって見

えて来た。
それは世間の荒々しい風に当ったことのない肌なのだ、と彼は思った。幼い頃から、優しい愛情にとりまかれて、ひびわれたり傷ついたりすることもなしに、ゆっくりと成熟してきた肌なのだ。だから、それはおのずから、見る人の心に、和やかな気分をひきおこしてくれるのだ。
日頃の彼なら、そうした優しい家族の砦のなかに、苦労しらずに育った人間には、反感を覚えがちなのに、今は不思議に、そうした想像が快かった。あの人と、せめて半日でも、何にも物を云わないで、向かい合っていたら、どんなにおれの心は安らかになるだろう。……
澄夫は半ばは物好きで住んでいる、この寺の隠居所の、古ぼけた、愛想のない部屋も、今日はどことなく優しい女らしい雰囲気が漂っているように感じた。風変りな窓の曲線にも、心を愛撫してくれる優美さを、いつになく感じる自分に、彼は快い驚きを覚えた。
「おれはいつもは、この部屋の殺風景なのを愛していたのだが。それがおれの心の荒涼とした有様に適わしいと思ったからだ」
彼はそう自分に向って云いながら、ひとりでに微笑が頬に浮んでくるのに気が付いた。
こうした、部屋の感じの変化も、あの女性が残して行ったものなのだ。
もう夕方近かった。

そうしていつか蒸暑さが退いて行き、北側の窓の外の、笹藪が風に鳴りはじめた。その音も日頃は彼の苛立ちやすい神経を、ささくれ立て、陰鬱な気分に彼を誘いこむのだったが、今日はその佗しい音までが、政子の残して行った愉しい気分と混りあうと、一種の甘美なものに変った。それは気取って云えば、「詩的な哀傷」というようなものだな、と彼は思った。
それから、あの姉弟が帰ってから、この時刻になるまで、小半日も何もしないで、こうして机に背を寄せかけて、ぼんやりしていたことに気が付くと、それがまた愉快だった。それも珍らしい経験だった。そして、そうした無為の時間を過したことに、後悔もしないでいる自分が、また新鮮な驚きだった。
そこへ、縁の外から、この寺の小坊主が声を掛けた。
「和尚さんが夕御飯を一緒にしないかと云ってますよ」
日曜には一日中、部屋に籠っていることの多い澄夫は、時々、こうして食事に呼ばれることがあった。和尚が先ほどの客について、何か率直な感想を述べたがっているのだな、と彼は思い、立ち上がりながら、また微笑した。
もう部屋はほの暗くなっていた。
「居眠りしてたんですね」
と、生意気な小僧が縁側の障子を、外から開けながら云った。
「ばかを云え。思索に耽っていたんだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と、彼は答え、それから、自分の気持が浮わついているのを、この少年に覚られはしまいかと思い直すと、頬を赤らめた。
「昼間のあの奇麗なお嬢さんのことを思索していたんですか」
と、小僧はなおも追求した。
「中学生の癖に、下らない冗談を云うと、和尚に叱られるぞ」
と、彼も軽口をたたいた。
「だって変ですよ、今日は牧本さんは」
そう云い返しながら、小僧が手を差し延ばして来た。
「おまえに小づいかをやれるほどおれは金持ちじゃないよ」
と、答えかけて、小坊主が手を差し出したのは、机のうえに置き放しになっていた急須と茶碗を受け取ろうとしているのだと察して、やはりおれは余程どうかしている、と彼は苦笑した。
澄夫は頭上の旧式な電灯をひねり、塗りのはげた盆に、急須と茶碗とを載せた。その時、茶碗のひとつに、微かに口紅のあとがにじんでいるのに眼をとめた。あの人はあれでも、目立たない化粧はしていたのだな、と彼は思い、それがまた彼女の清純さの証拠のように感じられて、気持がよかった。
庫裏へ向かう、池の畔りの道を歩いて行くと、先に立った小坊主が、また云った。
「牧本さん、よっぽど嬉しいことがあるんですね。牧本さんの口笛は初めて聞いた」
「口笛なんて吹いてやしない」
そう答えて、また彼は頬が熱くなった。
庫裏の土間に足を踏み入れると、既に大きな食卓のまえに坐っていた和尚が、大声で彼に話しかけて来た。
「今日は、特別に朗らかな気分らしいな」
「判りますか？」
と、答えながら、彼は板敷へ上った。和尚の無遠慮なからかいの言葉を受けるのは、こちらの神経が弱っている時はやりきれないのだったが、今日はそれも、自分の方から誘い出すようにして、冗談を浴せかけてもらいたいような気分だった。
「足音で判る。この寺へ来てから、おまえの下駄の音に邪念がないのは初めてだ」
それから和尚はコップのビールを一息に飲むと、
「先ほどのお客さんのせいかな」
と、彼の顔を覗きこむようにして云い足した。傍らの小坊主が飯茶碗を持ったまま、子供らしい発作的な笑いにとりつかれた。
「こら、豆小僧、おまえには関係のないことだ」
と、和尚は故意に叱る振りをした。
「和尚さんだって、関係ないや」
と小坊主は云い返した。

その、いつもはわずらわしいようなやりとりが、今日の澄夫には、また愉しかった。
「そうらしいですね」
と、彼は空のコップを和尚に向けて差し出した。
「何が？」
と、和尚は訊き返した。
「ぼくが朗らかな気分になっているのは、さっきのお客のせいらしいって云うんです」
「そうかい」
和尚は先をうながすように、そう相槌をうちながら、彼のコップにビールを注ぎ[illegible]めた。和尚の誘いに乗って、いい気になって話しはじめ[illegible]と、必ずあとでひどく辛辣なしっぺ返しをくうことは[illegible]ていたが、今の澄夫は喋りたい衝動をおさえられなかった。
「さっきの客は姉弟なんですが、ふたりの愛情が、向かい合っているこっちまで優しい気持にしてしまうんですね」
和尚はまたひと息にコップを傾けると、切りつけるように言った。
「なかんずく姉の方が、感銘を与えたようだな」
澄夫は素直にそれを承認した。
「ええ。あの人は、実に女らしい娘だと思いました。いくらか旧式な女かは知れませんが、ぼくははじめて、ああいう人に会い[illegible]た」
「毎日、新式すぎる女どもに揉まれすぎているせいだろう」
と、和尚はすかさず云い返して、大笑いした。
快い昂奮のままに、つい酒好きの和尚の相手をして、澄夫は飲みすぎてしまった。
格言めいた物の云い方を得意とする和尚が、
「若い男が迷いを深めるのも、また迷いを解くのも、若い女のお蔭だな」
と云ったのに対して、彼は、
「ぼくの場合は、深める方ですか、解く方ですか」
と、訊き返し、
「それは突進してみねば判らんよ」
と云い返されたのを覚えている。
大学卒業の間際に、学校へ残る決心がつかず、そうかと云って就職口を探す気力もなくて、毎日、ただ悩んで、いらいらと日を暮していた澄夫を、大学通りのすし屋で偶然知り合ったこの和尚が、暫く自分の寺へ来て暮してみないかと云ってすすめてくれた。そうして、和尚は時に、思い出したように、何でもいいから、若い者はまず「突進」してみろ、と忠告してくれた。澄夫の悩みは、要するに何もしないで懐手をしているところから発するのだから、どんな愚行でも、何もしないよりいいのだ、と云うのが、この青年好きの和尚の、澄夫に対する意見だった。学問でもスポーツでも、それでなければ賭事でも女遊びでも、と、和尚は云っていた。

「また突進ですか。ぼくにできるかな」
と、澄夫は答え、そう答えながら、これが和尚の日頃からすすめている「女遊び」だろうか、とふと思いついた。が、清潔好きな彼はこの「女遊び」と云う言葉と、昼の娘の姿とを結びつけようとした、自分の軽率さを直ぐ、心の中で叱りつけた。
離れの自分の部屋へ辿りついた時は、酒の弱い澄夫は、上にあがるのがやっとだった、そして何かしきりに呟きながら、這うようにして寝床を敷き、寝間着に着かえるのも億劫で、そのまま横になると、一気に眠りの底へ沈んでいった。
その眠りはどれほど続いたのだろう。彼は不意に眼覚めた。そして、枕許に昼間の娘が坐っているような気がして、驚いて闇のなかに眼を見開いた。たしかにあの娘が微笑しながら、彼の寝姿を眺めている。彼は枕もとのスタンドをつけた。電灯は苛立たしく二三回明滅してから、人をばかにするようにゆっくりと、光を室内に拡げた。
勿論、この狭い部屋のなかには、女の姿はなかった。ああ、あの人がこの部屋に残していった気配が、おれの眠りのなかまで浸みとおってきたのだな、と彼は思った。
彼は仰向いたまま、また眼を閉じて、もう一度、一瞬前の錯覚を甦らせようと、ちょっと試みた。が、妙に昂奮して冴えきった頭は、そんな突飛な幻想が、もう一度起る筈がない、という理性的な考えを生んで、彼を制した。
今、一体、何時なのだろう、と彼は雨戸を出し忘れた部屋のなかへ、微かに流れ入ってくる夜気を感じながら、考えた。それから、起き上って、机のうえの置時計を見た。十一時で停まっていた。
「おれは時計も巻かずに眠ったのだ。習慣にないことだ」
と、彼は思った。それもあの女から与えられた心の弾みのせいなのだ。……
寝る前に時計のネジを巻くと云うような習慣は、本来は便宜的なものなのに、一度でも忘れると、それをさも大変な失策をしたように感じ、そして自分の生きて行く能力に自信を失いそうになる。そういう自分の性癖に悩まされていた澄夫は、今夜はそのことが一向に苦にならずに、平然として今、床のうえにあぐらをかいて、改めてネジを巻いている自分が面白かった。自分のなかに、今まで気がついていなかった、不屈な自分が潜んでいた、と考えることは愉快だった。大体の見当で二時のところへ針を廻した。
それから気軽に立ちあがると、タオルを取って、首から胸にかけて拭いた。ひどい汗だった。いつもなら、大概の汗は我慢して拭かないで過す。そして、こんなに寝汗をかくのは、どこか悪いところがあるのか、身寄りのない自分が、今、病気になったら、どうしたらいいのか、などと半分、眠った頭のなかで、くよくよと思い患うのだったが、今は別人のように、身軽に、起き上って汗を拭き、ついでに寝間着に着換えて、そして、爽かな気分で、また横にな

った。そうしたことは全て、昼に会った娘の影響なのだ、と彼はまた、そこへ思いが行った。長い間の心の迷いから、自分は立ち上って、和尚の云うように、若者らしく「突進」することができるようになるのかも知れない。

彼はそうした明るい考えに昂奮し、仰向いたまま、胸に手をやって、汚い天井を眺めていた。まだ仲々、夜は明けないだろう。だからもうひと眠りしなければならないのだが、しかし、彼は今、直ぐ眠ってしまうのが惜しかった。この心の快い昂揚を、一刻でも、引き延ばしたかったのだ。

深夜は人間の空想を解き放つ。——彼は心の奥から、昼間の娘の姿が浮かび上がってくるのを感じると、その姿をよりはっきりと捉えようとして、いつの間にか眼を閉じた。いきなりこの部屋へ、初対面の彼を訪ねて来たあの娘は、彼に向きあうとすっかり固くなって、畳のうえに膝を揃えたまま、切口上で用事を切りだしたのだった。その相手のぎこちなさが、また彼の方にも反映して、そのために気難しそうな態度を彼がとったから、更にそれがあの娘の心を縛ってしまったのだろう。

しかし彼女の申し出を、彼が素直に引き受けてやると、はじめて彼女は、内気そうな笑いを頬に浮べた。その笑いは急に一座の緊張を解いた。

「まあ、どうぞ、お楽に。——」

と、彼ははじめて気がついたように、姉弟の両方に云った。

「やっぱりお願いしてみて、よかったじゃない、次郎ちゃん」

と、娘は傍らに首を縮めてかしこまっている弟を振り返りながら、揃えている膝の力を抜いた。それは彼女の奥にかくれていた子供らしさが、不意に表面に浮かび出て来たと云った感じで、彼にはほほえましかった。

「次郎君ですか？」

と、澄夫は先程、名乗られた名前と違う呼び方のようなので、念を押してみた。

「本当は政次郎なんですけど、私の名前が同じ政子なので、私たちは次郎ちゃんと呼んでいるんです」

そう答えて彼女は、また子供らしい無邪気な笑みを浮かべた。

「足を投げ出しても構いませんよ。何しろ座ぶとんもないところなんだから。それに、お見合いじゃないんですから」

澄夫は娘の無邪気な笑顔に誘われて、そんな無遠慮な軽口を敲いた。——今、床のなかでその下手な冗談を想いだすと、彼は思わず羞恥のために顔が熱くなって来た。おれは調子に乗ると時々、場所柄をわきまえない見当外れのことを云い出す癖がある。随分、非常識な男だと、先方は思ったかも知れない。

しかし、相手は、一向にその彼の「冗談」に傷ついた様子はなかった。彼女は気を許したように、明るい笑い声を

また立てた。笑いはじめると、全身でおかしくなってしまって、とまらなくなるような、小娘のようなところがある人なのだ。……

しかし彼女は不意に笑いやめると、真面目な顔に戻って云った。

「私、よっぽど図々しいんですのね。いきなり押しかけて来たりして。……」

彼女は彼の意向を計るように、澄夫の顔を覗きこんだ。彼はこの臆病そうで、傷つき易い心を持っていそうな、痛痛しいくらいの娘が、自分自身を「図々しい」などと形容したのに意外な感じがした。「飛んでもない」と、彼は相手を慰めてやりたかった。この訪問が彼女にとっては、余程の決心を要するものだったのだろう。だから、彼は相手の願いを、容易にきき入れられる状態に自分がいたことを、幸運だったと思った。もしおれが、不本意ながら断らなければならなかったら、この人はどんなに恥かしい思いをしなければならなかっただろう。

それにしても、彼が毎日つき合っている、あの和尚の先程の云いぐさを借りれば、「新式すぎる女ども」とは、あの人は何とかけ離れた世界に住んでいることだろう。そうした女どもの一人が、ごく最近も彼に、どんな乱暴な申し出を、しかも、何らの恥かしさも感じる様子がなく、彼に向かってしたかを、あの人に話して聞かせてあげたら、あの人は同じ年頃の同じ女性のひとりが、そんなに非道徳になれると云うことを想像しただけで、羞恥に耐えられなくて、全身が赤くなってしまうだろう。そうして、おれはあの「新式過ぎる女」のどんな無茶な提案よりも、あの人の羞恥に赤らむのを見ることの方に、心を揺られるに違いない。……

彼女はしかし、帰って行く頃には、はじめの臆病そうな様子は次第に消えて、彼に対する態度が、自然な親しみに満ちたものになって行った。用事が果たせたことも、彼女の気を楽にしたのだろうが、彼の気の置けない応対のせいもあったのだろう。おれにしては上出来だった、と、彼は自分を賞めてやりたくなった。

あの時、彼女は庭へ降りると、足をとめて、

「閑静でいいところですのね。随分、勉強もおできになりますでしょう」

と云いながら、池の方を眺めていた。

秋になったら、本当に彼女を招んで、この庭の紅葉を見せてやろうか。そんな提案を実際にする勇気が、彼にあるかどうかは別として、それは空想するだけで愉しかった。

このように、長い間かかって、彼は今日の昼の小一時間の光景を、ゆっくり思い出し直すと、ようやく安心して眠りに入って行った。

翌日は学校へ行きがけの小坊主が、縁先の障子を開けて、声を掛けてくれた。

「やっぱり寝坊してましたね。和尚さんが見に行ってやれ

と云ってましたよ。牛乳をここへ置いときますからね」

小坊主の足音は駆け出すようにして遠ざかって行く。澄夫は撥ねおきて、時計を見、この時間は昨夜、いい加減に合わせておいたのだから当にならないと気が付くと、少し慌てた。勤め先に遅刻すると云うようなことは、彼の最も嫌うことだった。一度そういうことがあると、一週間くらい不愉快なのだ。

それから、いつも小坊主と一緒に寺の門を出ると、丁度、間に合うと云うことを思い出し、顔も洗わないで、立ったまま牛乳を飲み、そうして急いで着替えをした。

勤め先の大学受験予備校の狭い入口まで駆けこむと、いつものように、受付のところに、学生たちが揉み合うようにして、大勢、背中を見せているので、間に合ってよかったと思った。

教師控室には入らずに、そのまま受付の横の昇降機に押し入った。いつも満員にきまっている狭い箱の、奥の壁にはりついて、昨日の今浦政次郎が肩をすぼめていた。

澄夫は彼にほほえみかけた。すると、直ぐ赤くなった政次郎は無理に顔を捻じまげて、彼の視線を避けた。その不自然な姿勢がぎこちなく、彼はそのねじれた首筋を見ているうちに、今度は自分まで気恥かしくなって来た。

ばかな、と彼は自分を叱った。何もやましいことをしているのでもないのに、何をおれは狼狽しているのか。

彼は昇降機を降りると、心を落ちつかせるために、廊下の窓際に歩み寄って、街を見下ろした。——どうして、あの少年はあんなに、はにかみやなのだろう。やはり昨日も姉が指摘していたように、人生に対して消極的で「闘志のない」人間なのだろう。もう二回も大学受験に失敗して、ますます生来の弱気を昂進させているらしい。勉強の実力はかなりあるらしいのだが、試験場に臨むと、本来の力の半分もだせなくなってしまうと云う。

だから、昨日の今浦姉弟の訪問となったわけでもあるが、昨日の彼等の用事というのは、毎日曜の午前に、政次郎が彼のところへ通って来て、個人的に英語を見てもらうと云うことだった。しかし、彼等の（と云うより、話をしたのは、専ら、姉の方だったが）云いぶんを聞いていると、この少年にとって必要なのは、勉強よりも精神鍛練の方ではないだろうか。そうだ、あの和尚の話でも聞かせてやったら、いいかも知れない。およそ、細かい心理的なわだかまりなどは、痛快に無視してしまう、ああいう豪傑がいるということが判るだけでも、気の小さい少年には薬になるだろう。

そうして、と、そこで澄夫は秘かに顔を赧らめた。時どき姉の方にも来るようにしてもらおう。弟の勉強の進み具合を報告する必要もあるのだから。——勿論、それは口実に過ぎない、と云うことも澄夫には判っているから、彼は後めたい気持に、忽ち捉えられた。

彼は自分の想いが、また昨夜のように夢のなかへ漂い出

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com